非エンジニアでも分かる

Claude Codeの仕組み

― AIがコードを理解し、業務を自動化するまで ―



Start Challenge Consulting co., ltd.
2026年8月発行依／依挑む力が、世界を照らす

Confidential ― 社外秘 ／ 無断転載・二次配布を禁じます

はじめに

Claude Codeは「コードを書く人のための道具」ではなく、「言葉で依頼した業務を実際に完了させるAI」である。非エンジニアが理解すべきは技術詳細ではなく、任せ方と守らせ方である。

Claude Codeが注目されている背景

- 生成AIの用途が「文章を作る」から「業務そのものを実行する」へ拡張している
- 依頼から作業・検証・報告までを一つの流れで担うAIが実務に入り始めている
- 専門知識がなくても、目的を言葉で伝えれば作業が進む環境が整いつつある

「エンジニア向けツール」という誤解

誤解① コードが書けないと使えない
実際 日本語の指示で操作でき、読み書きはAIが担う

誤解② 開発部門だけの道具である
実際 ファイル整理・データ処理など事務作業にも適用できる

誤解③ 大規模なIT投資が前提になる
実際 手元のPC上の定型業務から小さく始められる

本資料で分かること

1. Claude Codeが何をするツールなのか（通常のAIチャットとの違い）
2. AIがコードや業務内容をどのように理解し、作業を進めるのか
3. 非エンジニアの業務にどう適用できるのか（具体的な活用イメージ）
4. 安全に導入するために決めるべきルールと段階的な手順

想定読者

経営者・事業責任者
投資判断と適用範囲の見極めに必要な全体像

DX・AI推進担当者
導入設計、権限・ルール整備、社内展開の進め方

営業・マーケティング・バックオフィス担当者
自部門の定型業務への適用イメージ

注記｜事実：本資料の記載は指定された構成案に基づく整理。／解釈：「注目背景」「誤解」の指摘は執筆時点における一般的な受け止めについての当社解釈であり、統計値に基づくものではない。

そもそもClaude Codeとは

Claude Codeは、手元のファイルを自ら探して読み、修正し、実行して結果を確認するところまでを担う。回答を返して終わる生成AIチャットとは、担う工程の範囲が本質的に異なる。

① 提供元と位置づけ

Anthropicが提供するAIコーディング支援ツール。

対話しながら、開発や調査といったパソコン上の作業を支援することを目的としている。「AIと会話するアプリ」ではなく、「AIが作業するための環境」に位置づけられる。

② ファイルとコードを読み取る

パソコン上のファイルやコードを読み取れる。

利用者がファイルを一つずつ添付する必要はなく、指定されたフォルダの中から、必要なファイルをAI自身が探して内容を確認する。

③ 調査から確認まで実行する

指示に応じて、調査・修正・実行・確認までを行う。

「調べる → 直す → 動かす → 確かめる」という一連の工程を、人が都度指示しなくても連続して進められる。

通常の生成AIチャットとの違い

通常の生成AIチャット

聞かれたことに答える。作業の「案」や「方法」を提示するところまでを担い、実行と確認は人が行う。

Claude Code

頼まれた作業を終わらせる。ファイルの探索・変更・実行・検証までを担い、人は依頼と最終確認を行う。

補足｜「コーディング支援ツール」という名称だが、扱う対象はプログラムに限られない。文書・表計算・データファイルなど、パソコン上に置かれたファイル全般が作業対象となる。

注記｜事実：Claude Codeの提供元および基本機能（本資料の構成案に基づく）。／解釈：通常の生成AIチャットとの対比整理は当社によるもの。

Claude Codeを一言で表すと

人は「目的」と「条件」を伝えるだけでよく、手順の設計・実行・報告はAIが担う。これは新しい道具というより、新しい担当者を迎える構図に近い。

「会話しながら、パソコン内の作業を進めるAI」

1

人が目的を伝える

「何を、どうしたいか」を自然な言葉で伝える。手順の指定は不要。

2

AIが作業手順を考える

目的を満たすために必要な作業を分解し、進め方を組み立てる。

3

必要なファイルを探す

対象フォルダの中から関係するファイルを見つけ、内容を確認する。

4

修正しテストして報告

変更後に動作を確認し、何をどう変えたかを人に報告する。

人間の部下・アシスタントに例えると

上司（人）が担うこと	部下（Claude Code）が担うこと
・達成したい目的とゴールを決める ・守るべき条件・制約・禁止事項を伝える ・出てきた結果を確認し、採用可否を判断する	・目的から作業手順を設計する ・必要な情報・ファイルを自分で集めて読む ・作業を実行し、動作を検証し、結果を報告する

注記｜事実：①～④の動作構成（本資料の構成案に基づく）。／解釈：「上司と部下」の対比は理解のための当社による例えであり、人事上の位置づけを示すものではない。

Claude Codeが動く基本的な流れ

人が関与するのは「依頼」と「結果確認」の二点のみで、探索・読解・判断・編集・実行・検証はAIが連続して処理する。この工程数の差が、体感の違いを生んでいる。

STEP 1 人	STEP 2 AI	STEP 3 AI	STEP 4 AI	STEP 5 AI	STEP 6 AI	STEP 7 人
自然な言葉で依頼する	**目的と条件を理解する**	**関係するファイルを探す**	**内容を読み取り対応を考える**	**ファイルを作成・修正する**	**コマンドやテストを実行する**	**結果を確認して報告を受ける**
「先月分の売上を集計してレポートにして」といった日常の言葉で伝える。	依頼の意図、対象範囲、守るべき制約を整理し、作業計画を立てる。	指定フォルダを検索し、作業対象となる候補を絞り込む。	中身を読んで現状を把握し、どこをどう変えるかを判断する。	案の提示ではなく、実際のファイルを書き換える／新たに作る。	処理を動かし、意図どおりに動作するかを確かめる。	変更点と実行結果の報告を読み、採用可否を人が判断する。

人が担うのはSTEP 1「依頼」とSTEP 7「確認」のみ。STEP 2〜6はClaude Codeが自律的に処理する。

補足｜一度で終わらない場合の動き

STEP 6のテストで問題が見つかった場合、Claude CodeはSTEP 4に戻って原因を考え直し、修正と再実行を繰り返す。人が毎回指示を出し直す必要はなく、条件を満たすまでの試行はAI側で完結する。ただし、この反復の途中で何が変更されたかは、STEP 7で人が確認できる形で記録される。

注記｜事実：STEP 1〜7の処理順序（本資料の構成案に基づく）。／解釈：人が関与する工程を2点に限定した整理は当社によるもので、実際の関与点は設定する権限・承認ルールにより変動する。

通常のAIチャットとの違い

両者の差は「賢さ」ではなく担当工程の広さにある。通常のチャットが助言で止まるのに対し、Claude Codeは実ファイルの変更と実行までを担うため、成果物が直接生まれる一方で権限管理が必須となる。

比較項目	通常のAIチャット	Claude Code
主な役割	質問への回答	**実際の作業を進める**
ファイル確認	添付された範囲のみ	**指定フォルダ内を自ら探索**
ファイル編集	修正案を提示	**実ファイルを変更**
コマンド実行	原則できない	**実行できる**
テスト	方法を説明	**実際に実行して確認**
得意分野	相談・文章作成	**開発・調査・自動化**

読み取るべき示唆

通常のチャットは「考える支援」、Claude Codeは「手を動かす支援」。両者は置き換え関係ではなく、用途によって使い分ける対象である。

同時に生じる管理上の論点

実ファイルを変更しコマンドを実行できるということは、誤操作の影響も現実に及ぶということ。権限設計と承認ポイントの設定が前提となる（P14・P15）。

注記｜事実：比較表の6項目は本資料の構成案に基づく。／解釈：「置き換えではなく使い分け」「権限設計が前提」は当社の見解。

Claude Codeを構成する5つの要素

「頭脳・目・手・実行力」の4要素が作業を前に進め、5つ目の「ルールを守る仕組み」がその範囲を限定する。管理側が設計すべきは、主に第5の要素である。

① 指示を理解する頭脳

依頼内容を読み取る

自然な言葉で書かれた依頼から、目的・対象・条件を取り出し、必要な作業へ分解する中核機能。

人に例えると
依頼を受けて段取りを組み立てる担当者の思考。

② ファイルを読む目

コードや資料を確認する

対象フォルダを検索し、関係するファイルを開いて内容を把握する。読み取り専用の動作であり、この段階では何も変更しない。

人に例えると
着手前に資料を集めて読み込む調査行動。

③ 編集する手

ファイルを作成・修正する

判断した内容を実際のファイルに反映する。ここから先は現物に変更が加わるため、対象範囲の限定が重要になる。

人に例えると
実際に資料を書き換える作業そのもの。

④ コマンドを実行する力

処理やテストを動かす

集計処理やテストを実行し、変更が意図どおりに動くかを自ら確かめる。結果は次の判断材料として使われる。

人に例えると
作った資料を実際に動かして検算する行為。

⑤ ルールを守る仕組み

権限や禁止事項を確認する

触れてよい範囲、実行してよい処理、承認が必要な操作を判定する。①〜④の力を制限する役割を担う。

人に例えると
社内規程と決裁ルール。導入側が設計する部分。

導入検討時に押さえるべき点

①〜④は提供機能として最初から備わっているため、利用側が個別に構築する必要はない。一方で⑤は、どの範囲まで任せるかという組織側の意思決定に依存する。すなわち、導入の成否を左右するのは技術要素ではなく、⑤をどう定義するかである。具体的な設計手順はP14・P15で扱う。

注記｜事実:①〜⑤の要素分類は本資料の構成案に基づく。／解釈:「⑤が導入の成否を左右する」は当社の見解。

AIはどのようにコードを理解するのか

AIはコードを「処理を説明する文章」として読む。全体を暗記するのではなく、目的に関係する箇所だけを絞り込んで読むため、大量のファイルがあっても作業が成立する。

理解の5つの働き

1 コードを「処理の説明文」として読み取る

記号の羅列ではなく「何を受け取り、どう処理し、何を返すか」という手順の記述として読む。この点で、業務マニュアルを読む作業に近い。

2 ファイル同士の関係をたどる

あるファイルが他のどのファイルを呼び出しているかを追跡し、変更の影響が及ぶ範囲を把握する。

3 エラー内容から原因候補を絞り込む

実行時に出たエラーメッセージを手がかりに、疑わしい箇所を推定し、確認すべきファイルを選ぶ。

4 過去の修正内容やルールを参照する

変更履歴や、あらかじめ定めた作業ルール（P11のCLAUDE.md）を確認し、その場の判断が既存方針から外れないようにする。

5 すべてを一度に読むのではなく、必要な情報を探す

全ファイルを丸ごと読み込むのではなく、目的に応じて読む対象を選ぶ。この選択的な読み方が、大規模な資産でも動作する理由である。

身近な作業に置き換えると

新任担当者が引き継ぎ資料の山を渡されたとき、全ページを読んでから着手する人はいない。まず目次と関連資料の当たりをつけ、必要な章だけを読み、不明点は履歴や過去のやり取りで補う。

Claude Codeの読み方もこれと同じで、「全部を覚える」のではなく「必要な箇所を見つけて確認する」方式をとる。

この読み方の限界

選択的に読む方式は効率が高い反面、読まなかった箇所に関係する事情があれば見落としが生じうる。暗黙のルールや、資料に書かれていない社内事情は特に伝わらない。

だからこそ、前提条件を明文化して渡すこと（P11）と、人による確認（P14）が必要になる。

注記｜事実：理解の5つの働きは本資料の構成案に基づく。／解釈：「引き継ぎ資料」の例え、および見落としリスクの指摘は当社によるもの。

エージェント型AIとは

エージェント型AIの本質は「一往復で終わらないこと」にある。目的を満たすまで調査・判断・実行・確認を自ら繰り返すため、依頼者は手順ではなくゴールを渡せばよい。

回答するだけでなく、目的の達成まで行動し続けるAI

行動サイクル:「調査 → 判断 → 実行 → 確認」を繰り返す

調査
情報とファイルを集める

›

判断
対応方法を決める

›

実行
編集・処理を行う

›

確認
結果を検証する

↑ 条件を満たさない場合は「調査」へ戻り、別の方法を試す

この反復を人の指示なしに続けられる点が、単発の回答を返すAIとの決定的な差となる。

エージェント型AIの3つの特徴

① 目標から作業を分解する
「レポートを作る」から、必要な工程を自ら洗い出す。

② サイクルを自ら回す
各工程の結果を見て、次に何をするかを都度決める。

③ 失敗しても止まらない
うまくいかない場合は原因を調べ、別の方法を試す。

Claude Codeが「自律型開発エージェント」と呼ばれる理由

Claude Codeは、上記のサイクルを実際のファイルとコマンドに対して回せる。すなわち「調査」は実ファイルの探索であり、「実行」は実ファイルの変更であり、「確認」はテストの実行結果に基づく。助言の反復ではなく作業の反復であるため、自律型の開発エージェントと位置づけられる。

管理上の含意:自律的に動くということは、途中経過に人が介在しない区間が生じるということでもある。どこまでを自動で進めさせ、どこで人の承認を挟むかを事前に決めておく必要がある。

注記 | 事実:エージェント型AIの動作特性は本資料の構成案に基づく。／解釈:「管理上の含意」は当社の見解。

Claude Codeが利用する「ツール」

AI本体は「何をすべきか」を判断するだけで、実際の操作はツールが担う。したがって、AIに与えるツールを絞ることが、そのまま実行できる範囲の限定になる。

ツール	担う操作	影響の種類
ファイル検索	指定フォルダから対象候補を見つける	読み取りのみ
ファイルの読み取り	中身を開いて現状を把握する	読み取りのみ
ファイルの編集	実際のファイルを作成・修正する	**現物が変わる**
コマンドの実行	集計処理や変換処理などを動かす	**現物が変わる**
テスト・動作確認	変更が意図どおり動くかを検証する	検証
Gitによる履歴確認	いつ誰が何を変更したかを確認・記録する	追跡・記録
外部・社内システム連携	外部サービスや社内システムと接続する	**社外・他系に及ぶ**

AI本体とツールの役割分担

AI本体（判断する側）
目的から「今どのツールを使うか」を決める。自ら操作はしない。

↓ 指示

ツール（操作する側）
検索・読み取り・編集・実行など、実際の操作を担当する。

管理のポイント

操作はすべてツールを経由するため、**利用可能なツールを制限すれば、AIができることも同時に制限される**。

導入初期は「読み取り」中心から始め、実績を見ながら編集・実行・外部連携へ段階的に広げる進め方が現実的である。

注記｜事実：利用ツールの種別は本資料の構成案に基づく。／解釈：「影響の種類」の分類、および段階的にツールを開放する進め方は当社の提案。

CLAUDE.mdとは

CLAUDE.mdはAI専用の業務マニュアルであり、口頭指示に相当する前提条件を文書として固定する。非エンジニアが最も貢献できるのは、この「業務ルールの明文化」である。

Claude Codeが作業前に必ず読む「プロジェクト専用の業務マニュアル」

CLAUDE.mdに書く4つのこと

1 プロジェクトの概要を伝える

何のための仕事か、誰が使うものかを示す。目的が分かることで、迷った場面での判断が業務意図に沿う。

2 使用する技術や作業ルールを指定する

使用する仕組み、書き方の統一方針、社内の作業手順など、守らせたい標準を明記する。

3 実行すべきテストを定義する

作業後に必ず確認させる項目を決めておく。これにより、報告前の自己検証が省略されない。

4 編集してはいけない範囲を伝える

触れてはならないファイル・フォルダ、扱ってはならないデータを明示する。最も重要な記載項目。

非エンジニアでも書ける指示例

■ この仕事について

毎週の営業売上レポートを作成する業務です。読むのは営業部の管理者です。

■ 作業のルール

・金額は税抜で扱い、単位は千円で表示してください
・出力ファイル名は「売上週報_年月日」としてください

■ 触らないでほしいもの

・「原本」フォルダの中身は変更しないでください
・個人名が含まれる列は集計に使わないでください

上記のとおり、必要なのは日本語で業務の前提を書くことのみであり、技術知識は前提とならない。**業務ルールを最もよく知る担当者こそが、この文書の適切な作成者である。**

注記｜事実：CLAUDE.mdの位置づけと記載項目は本資料の構成案に基づく。／提案：右側の記載例は当社が作成したサンプルであり、実在の業務ルールではない。

Claude Codeでできること

適用領域は開発だけでなく、資料作成・データ処理・調査・文書化にも及ぶ。着手すべきは「手順が決まっており、判断の余地が小さい業務」である。

A. 作る・直す

Webサイトの文章・画像・レイアウト修正
掲載文の差し替え、画像の入替、表示位置の調整など。

社内ツールの改修
既存の社内システムの表示項目追加や出力形式の変更。

定型業務を処理するスクリプトの作成
毎回同じ手順で行っている作業を、実行可能な処理として用意する。

B. 集める・処理する

データ集計やレポート作成
複数ファイルの数値を集計し、表やグラフとして出力する。

Excel・CSV処理の自動化
形式の統一、重複の除去、項目の抽出、ファイルの結合など。

エラー原因の調査
処理が失敗した際に、原因箇所と条件を特定して報告する。

C. 検証する・文書化する

テストの作成・実行
確認すべき項目を洗い出し、実際に動かして結果を示す。

手順書・仕様書の作成
実際のファイル内容に基づいて、作業手順や仕様を文書化する。

現状の棚卸し
既存ファイルの構成や処理内容を読み取り、一覧として整理する。

向いている業務の条件

- 手順が決まっており、繰り返し発生する
- 正しさを機械的に確認できる（数値が合う／表示が正しい）
- 扱うデータの範囲が限定でき、機密性が高くない
- 失敗しても影響が限定的で、やり直せる

慎重に扱うべき業務

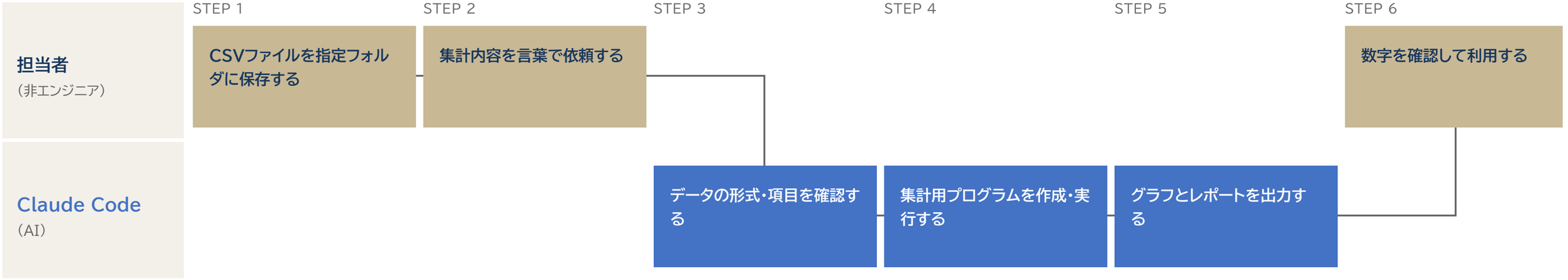
- 正解が一つに定まらず、経営判断や交渉を含む
- 個人情報・機密情報を直接扱う
- 本番環境や社外公開物に即時反映される
- 誤りが顧客・取引先へ直接影響する

注記｜事実：A〜Cの適用領域は本資料の構成案に基づく。／提案：「向いている業務／慎重に扱うべき業務」の判定条件は当社による整理。

非エンジニアの活用イメージ

担当者が行うのは「ファイルを置く・依頼する・数字を確認する」の3点のみで、形式確認から出力までの中間工程はAIが担う。特別な操作習得を前提としない点が要点である。

例：毎週の売上レポート作成 — 6ステップの役割分担



この形が成立する理由

担当者が行うのはSTEP 1・2・6のみで、いずれも既存業務の延長にある行為である。データ形式の解読、処理の作成、グラフ化といった専門性を要する工程（STEP 3〜5）をAIが担うため、**担当者側に新たな技術習得を求めない**点が特徴となる。

その他の活用例

Webページの文言変更　掲載中の表現・価格・日付などの差し替え。

アンケート結果の整理　自由記述の分類、集計表への整形。

定型ファイルの一括変換　形式・命名規則・並び順の統一処理。

留意点｜出力された数値・文言の妥当性確認（STEP 6）は省略できない。AIによる自動処理を前提としても、業務上の責任は依頼側に残る。

注記｜事実：STEP構成と活用例は本資料の構成案に基づく。／提案：役割分担図および「新たな技術習得を求めない」という整理は当社によるもの。定量的な効果は業務内容により変動するため記載していない。

利用時に注意すべきこと

実ファイルを変更できることは利点と同時にリスクでもある。AI側の精度向上に期待するのではなく、権限・承認・履歴という運用設計でリスクを制御する必要がある。

No	注意すべきこと	想定されるリスク	とるべき対応
1	**AIの判断が常に正しいとは限らない**	前提の誤読や見落としにより、意図と異なる処理・集計結果が生じうる	**出力物は成果物ではなく「案」として受け取る**
2	**重要な変更は人が確認する**	確認を省いた変更が、そのまま業務や社外公開物に反映される	**変更範囲に応じた承認者と確認方法を事前に定める**
3	**個人情報・機密情報の取り扱いを決める**	扱ってよい情報の線引きが不明確なまま、機微情報が処理対象に入る	**利用可能データと禁止データを文書で定義する**
4	**実行できる権限を必要最小限にする**	広い権限を与えると、想定外の範囲まで変更・実行が及びうる	**対象フォルダと利用ツールを限定して付与する**
5	**本番環境へ直接変更させない**	検証前の変更が稼働中の業務に直接影響し、復旧に時間を要する	**作業対象は検証環境・複製データに限定する**
6	**変更履歴とバックアップを残す**	何がいつ変わったかを追えず、原因究明と切り戻しができない	**履歴管理の仕組みと復元手順を事前に用意する**

管理の要点は「AIを信頼するかどうか」ではなく、「誤った場合に気づき、戻せる状態にしておくかどうか」である。

注記｜事実：注意事項6項目は本資料の構成案に基づく。／解釈・提案：「想定されるリスク」「とるべき対応」および下部の要点は当社による整理であり、実際の運用ルールは自社の情報管理規程に従って定める必要がある。

安全に導入するための5ステップ

全社導入から始めるのではなく、小さな定型業務で「データ範囲・権限・承認点」を確定させ、評価を経て対象を広げる。範囲を絞ることが、そのままリスク管理となる。

STEP 1　対象選定

小さく定型的な業務を選ぶ

手順が固まっており、失敗しても影響が限定される業務を1つ選ぶ。効果の大小より、検証しやすさを優先する。

決めること
対象業務／担当者／期間

STEP 2　データ定義

利用できるデータと禁止データを決める

扱ってよい情報の範囲を明文化する。個人情報・機密情報については、原則として対象外とする判断を先に置く。

決めること
利用可データ／禁止データ／保管場所

STEP 3　権限設定

Claude Codeに与える権限を設定する

対象フォルダと利用可能なツールを限定する。導入初期は読み取り中心とし、編集・実行は検証環境に限る。

決めること
対象範囲／利用ツール／実行環境

STEP 4　承認設計

人が確認する承認ポイントを設ける

どの段階で人が確認するかを工程上に明記する。特に外部公開・本番反映の前は必須の確認点とする。

決めること
承認者／確認項目／記録方法

STEP 5　評価・拡大

効果とリスクを評価して対象を広げる

所要時間・品質・発生した問題を記録し、判断材料として次の適用範囲を決める。拡大は段階的に行う。

決めること
評価指標／評価時期／拡大条件

導入候補例（STEP 1の対象として）

- **社内向け資料の整形**　体裁・命名・並び順の統一。社外影響がない。
- **CSVデータの加工**　複製データを対象とすれば原本に影響しない。
- **テスト環境のWebサイト修正**　公開前に人が確認できる。

STEP 1で選ぶ際の判断基準

上記3例はいずれも「①手順が定型である ②機密性が低い ③やり直せる」という共通条件を満たす。逆に、この3条件のいずれかを欠く業務を初回対象とすることは推奨しない。効果の大きい業務は、評価後の拡大段階（STEP 5）で扱う。

注記｜事実：5ステップおよび導入候補例は本資料の構成案に基づく。／提案：「決めること」および3条件の判断基準は当社による整理。実施内容は自社の情報管理規程・体制に応じて調整が必要。

まとめ・お問い合わせ

Claude Codeは「提案するAI」から「作業するAI」への移行を示す存在である。非エンジニアの役割は操作習得ではなく、業務ルールを明文化し、確認点を設計することにある。

① 位置づけの変化

「提案するAI」から「作業するAI」へ

回答を得るための道具から、作業を終わらせるための道具へと役割が移った。評価軸も「答えの質」から「成果物の妥当性」に変わる。

② 動作の要点

依頼から確認まで一連で進められる

自然な言葉での依頼を起点に、調査・編集・実行・検証までを連続して処理する。人が関与するのは依頼と最終確認である。

③ 非エンジニアの役割

業務ルールと目的を伝える役割を担える

技術知識よりも、業務の前提・制約・判断基準を言語化する力が価値を持つ。業務を最もよく知る担当者が適任となる。

④ 導入の前提条件

権限管理と人による確認が不可欠

実ファイルを変更できるため、対象範囲の限定・承認点の設定・履歴の保全を設計したうえで運用する必要がある。

次に決めるべきこと

① 最初に適用する定型業務を1つ選定する ／ ② 利用可能データと禁止データを定義する
③ 付与する権限の範囲と実行環境を決める ／ ④ 人による承認ポイントと評価時期を設定する

導入相談・お問い合わせ

自社業務への適用範囲の検討、対象業務の選定、権限・承認ルールの設計についてご相談を承ります。

Start Challenge Consulting 担当:平出 メール:info@startchg.com（詳細はP17）

本資料に関する補足

本資料は概説を目的としており、個別の業務要件・情報管理規程に応じた検討は別途必要となります。

注記｜提案:「次に決めるべきこと」①〜④は当社による推奨事項。／お問い合わせ先の詳細はP17に記載。

お問い合わせ

導入の可否判断に必要なのは、全社方針の策定ではなく「最初の1業務」の特定である。対象業務の選定から権限・承認ルールの設計まで、個別のご相談を承ります。

お問い合わせ先

Start Challenge
Consulting co., ltd.
挑む力が、世界を照らす

Start Challenge Consulting
info@startchg.com ／ 担当：平出

ご相談いただける内容

1 適用範囲の見極め
自社業務のうち、どこから着手すべきかの整理と優先順位づけ。

2 権限・承認ルールの設計
利用可能データの定義、付与する権限の範囲、人による確認点の設定。

3 試行から評価までの伴走
対象業務での試行、効果とリスクの評価、拡大範囲の判断支援。

ご相談時にお知らせいただきたいこと

・対象として想定している業務と、その担当部門
・扱うデータの種類（個人情報・機密情報の有無）
・現在の作業手順と、1回あたりの所要時間

まずは「小さく定型的な1業務」の選定からご相談ください。適用可否の見極めは、その1業務の検証で判断できます。

注記｜提案：「ご相談いただける内容」「お知らせいただきたいこと」は当社の標準的な進め方に基づく記載であり、実際の支援範囲は個別のご要望に応じて調整します。